

---

# 竜王（笑）と少女

トロピカル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜王（笑）と少女

### 【Nコード】

N10820

### 【作者名】

トロピカル

### 【あらすじ】

これは竜王バハムート零式に転生した主人公が少女を守るおはなし

ブローグ

「ぶるあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああ！！」

テラフレア！！

『ぎゃあああああああああああ！！！！』

「っそんな・・・管理局が・・・ミッドチルダが・・・！？」

「なんなんだよあの竜は！？」

「うあああああああああああああああああああああああああああああ  
！！」

この日ミッドチルダは管理局への攻撃に巻き込まれ消滅した・・・

たった一発の竜王の一撃によって・・・。

「お前何やってんの――――！！！！？」

「ンギヤ？グルア。」（あ？神さんじゃないか。）

おひさ〜と久しぶりに出てきた神様にあいさつする。紹介しよう。こいつが俺を竜王バハムート零式に転生させてこの世界に放り込んでくれやがった神様（笑）だ。

まあ今となつては竜王Lifeに満足してるんだけどね。んで今日はちょっかい出してきた管理局がうつつとうしかったからちよつと本気のテラフレアを一発撃つたみたらミッドチルダやその周辺まで跡形もなく消滅させてしまい今はクレーターがあるのみ。

後悔も反省もしていないがな（笑）

だって俺今人間じゃないしー。バハムート零式だしー。転生したその日から管理局に目つけられて危険生物ランクSSSに認定されて毎日毎日ゴキブリのように武装した管理局員が現れるんだもの。さすがの俺もキレちゃうよ。まあ怪我1つしなかったけどw

ってなわけであ

「グルアアアアアア！」（俺は無罪だ！）

「もうええわい・・・。」

何故か呆れられちゃったようですw

「んーこの世界はオヌシに向いてなさそうだからな。違うところに移

ってもらっぞ。」

「グルアアアアアギヤオオオオオン」(面白いとこだったらどこでもいいさ。あつバハムート零式なのは変わらないんだよね?)

せっかく慣れてきたところだ。いまさら変えたくはないんだ。

「転生したのだから死ぬまで変わらんよ。んでだモンハン2Gの世界なんかどうだ?」

なぜポータブルの2Gなんだよ?

「それは今度3が出るからじゃ!」

「ぐるるるる。ぶるああ!」(さいですか。てか人の心を読むな!)

「んじゃ逝ってみよ!」(あ、あと制約つけるからオヌシ強すぎだしw)」

「ぶるあああああああああああああああああ!」

瞬間、ものすごい光があたりを包み込んだ。

そしてこの惨状をひきおこした謎の竜は後に災厄の竜王と呼ばれ管理世界中から恐れられた。

## 第一話

聞こえてくるのは野鳥の鳴き声

見渡せば緑が一面の密林

そして手足を動かそうとしても動かない我が体



ただ紅く光る球体の石のみが天然の台座に置かれている

「どつしてこうなった・・・。」

現実逃避しかけたけど無理だった。ただいまこの紅く光る石・・・  
この『召喚マテリア』の中に俺は入ってます。はい。

あのクソジジイ！最後に重要なこと言いやがって！制約とはこのことか！？

どうやら俺はむやみに力をふるえないようにこの魔石に封印されちゃったみたいだ。この封印は心優しき少女のみとけるらしい（神様いわく悪用されぬためらしい）がこれはよかったと思っている。男になんか従いたくねえし。あとこの魔石には主人を守る力もある。（狙われて殺されないように）・・・神様親切すぎるよ・・・少女に対してのみ・・・。

てかおもいつきり召喚獣っぽくなっちまったな。（笑）

前の世界で自由に暴れるのもよかったが少女の守り手になるっていうのもいいなあw

よし、我が力でおもいつきり驚かせよう（笑）

10

10

10

私の名前はエリス。先日上級ハンターになったばかりです。今日は私が住んでいる村の近くの密林でドスランポスとランポスの群れが確認されたのでクエストを受注し仲間のリリーとエレーナと一緒に密林に向かったのですが……。

密林に着きベースキャンプを組み立ててランポスの探索を行っていると真上からランポス奇襲を受けました。1匹2匹だけならなんとかなったのですが真上から出てくるは出てくるはでいつきにランポスに囲まれてしまいました。なんとか私たちはエレーナが大剣『ブレイズブレイド』でなぎ払った隙に煙玉を投げ脱出できたのですが気づいた何匹かが追ってくるので一番足が早く罾を仕掛けるのがうまい私が囷になりました。もちろんピンチの時は私の村では貴重なモドリ玉を使うつもりです。

ですが私のライトボウガンで牽制しつつ罾で次々と倒していったのですがドスランポスが現れたのです。もうモドリ玉を使うしかないと思ってポーチを探り……探り……あれ？

ごそごそ……無い

「うわーん助けてー（泣）」

そして私は走りだしました。

というわけです。ってキャー！今飛び掛ってきたランポスの爪がかすりましたー！ううっ私の髪が……（泣）。

「しかしこのままでは私の体力が尽きてしまいます。どうすれ

突然の浮遊感足元をみるとちょうど私が入るくらいの大い穴があります・・・てっ!?

次に来るの重力にしたがう落下感

「いやあああああああああああああ  
あああああああああああああああ  
あああああああああああああああ  
あああああああああああああああ

[illegible]

穴に落ちちゃいました

ひゅゝスポン

「イタい!？」

「ぐすっ なんですか今日は？ 散々な目に会いました y . . . 」「

私が目をあけると紅い光が飛び込んできました。緑色の中にひときわ目立つ赤い紅い光

その発生源は樹の台座に置かれている宝玉だ。まるで私のことを待っていたかのように光り、点滅する紅い宝玉

私は、その宝玉に誘われるように近づき・・・。

触れた

次の瞬間

「ぶるあああああああああああああああああああああああ  
ああああああああ！！！」

「ひっひっ!？」

竜王の封印が解かれた



## 第二話 やつときたよ（笑）

きたきたきたきたきた来た――――――――――

この世界にきてマテリアに封印されて一ヶ月。

ここつてもしかして秘境的なところで誰も見つけられないんじゃないかね？  
とか思ってたら少女の悲鳴が聞こえてきた。

おそらくはすぐ近くにいるんだろうがここは周りから見たら崖の下  
で上からは光が届かないので人間の目では真っ暗にしか見えないだ  
ろう。

ここに来るためには崖から落ちるか崖に開いている穴の向こうから  
入り口を見つけて入るしかない・・・

「・・・あああああ!!」

ひゅゝスポン

・・・は？

その穴から勢い良く女の子が飛び出してきた・・・まじか・・・。

すると我が体が少女に反応するように紅く光りだした。

もしかしてこの少女が我がマスターになるのか。

ふむふむ……。身長は154ぐらいか。うむ、あの長い赤みがかかった金髪はすばらしい！顔も良し！胸は……。将来に期待しよう。

ボウガンをもっているからやはりハンターか。合格だな。我がマスターと認めよう！！さあ我に触れ封印を解くのだ！！ハリーハリーハリーハリー！！！！

マテリアをピカピカ光らせ少女を呼びかける。

さあ我に触れろ！

少女は呆然とした顔でこちらによちよちと歩いてくる。

そしてついには……

触れた

「ぶるあああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああ！！！」

「っひっ!？」

我が体が、竜の王がマテリアから解き放たれ虚空に現れる。

放たれた瞬間にあたりを圧倒的なまでの威圧感が支配した。野鳥たちが、虫がモンスターが、さつきまで騒ぎ立てていたドスランポスとランポスの群れもいつせいに黙り込み息を潜めた。

密林が死んだように静かになった。一匹の絶対な支配者によって。

飛び出したその支配者は3対6枚の羽を広げゆっくりと羽ばたき少女の前まで降りてくる。

銀色の身体は谷底のこの暗闇でもきらめいていて神秘さが増している。

そして召喚者、ユリアはため息をつくように息をはき、ただこの美しすぎる竜の王をまばたき1つせずに見とれていた。

この光景を見れたことを神に感謝さえしていた。

しかし、この美しい竜王は内心（え？反応なし！？汗）と一人どう

しょうが困っていたが・・・。

### 第三話 問おう貴方がマスターか（笑）

「竜が王バハムート零式、ここに見参！！問おう貴方がマスターか？」

少女が硬直したまま動かないので話しかけてみた（ネタに走って見たw）

「へうつ！？えええ？マツマスター？？？」

いい具合にテンパってるわw

「貴方がこのマテリアに触れたのなら貴方がマスターである証なり。」

「ええつと確かに私がふっ触れましたが私なんか貴方のマスターだなんて・・・。」

「貴方は選ばれたのだよ。心優しき少女よ。さあ名前を。」

「心優しいだなんて／＼／＼と名前ですね！？・・・すーはー  
ー」

あわわつとテンパッていたが一回深呼吸しだした。何この子オモシロイw

そして俺の瞳をまっすぐ見つめて。

「私の名前はエリス！クルル村のハンター、エリス・クルンスト！」





なんか突然叫びだしたぞ？

「どうかされたか主エリス？」

「えっと、私なんかの剣とか盾なんかなくてもいいですよー！  
しかも竜王様なんかに！」

「我だと不満か？」

「うえええ！？？いいいえ！そんな滅相もないです！！えとえと私  
なんかにはもったいなさすぎるというか・・・アウアウ／／／」

慌て過ぎだよエリスちゃん（笑）

ならこれはどうだ？

「我は主エリスが良いのだ」

「・・・卑怯です・・・そんなこと言われたら断れません」

なんか落ち着いたようだ。ホントオモシロイw

「ならばよし。さてマスター、そのマテリアは我の半身でもある故、常に持っていて欲しい。」

あつはい。っと言ってマテリアを大事に持ってポーチに入れる。

「でわマスターご命令を。」

「えつつ命令ですか???」

「さよう、私の力は強大故、死者蘇生以外では大抵のことはできるぞ。例えば、国を滅ぼしたり、嫌いな者を抹殺したり、強いモンスターを無傷で剥ぎ取ったり、私の力を宿した武器を造ったり、世界を滅ぼしたり……。」

さあどうする？と聞くと……。

「友達になってください！」

あれ？

聞き間違えたのかなー

「友達になってください!!」

聞き間違えじゃないみたいだ

「よいのか？」

最終確認すると

「はい！！」

笑顔で答えたよ

純粹すぎる！なにこれ自分がものすごく汚れているのを自覚されちゃったよ！？眩しい！あの子が眩しすぎる！！？やめろ！俺をそんな目で見ないでくれーーーー！！

「あの、いいのでしょうか？」

「我でよければ……。」

「うわぁい、ありがとうございます」

ああ、ほんとかなわないわ。この小さなマスターにはw

「あ、でも／＼」

「どうした？」

「崖の上まで運んでください／＼」

なんか抜けてるなw

俺はそんなマスターに苦笑し、右手を差し出した。

「乗ってくれマスター」

「エリスです。エリスと呼んでください」

「わかった。エリス乗ってくれ。」

俺が名前で呼ぶとうれしそうに手に飛び込んできた。

「はい!!!ムーちゃん!」

ムッ  
ムー  
ちゃん！  
？  
？  
？  
？  
？  
？



## 第四話 決戦は突然なの

「エリスー！ー！！」      「エリスー無事だったのね！！」

エリスがベースキャンプに無事に戻るとエレーナとリリーが血相変えて飛んできた。

「うん無事だよ！ちょっと髪の毛切れちゃったけど。」

「エリスの髪の毛が！？女の敵ねあのランポスども！！」

「エレーナ落ち着いてよ。エリス、ほんとにケガはない？モドリ玉使ったと思ってたからすぐ戻ると思ってリリーの切り傷を治してたの。」

どうやらリリーの方は最初の奇襲の時肩を上から飛び降りてきたランポスたちにより怪我してしまったそうだ。

「うん、擦り傷程度だから問題ないです。」

えへへと笑うエリスに安心したのかホツとする二人であった。

「んじゃ、このクエストは失敗ということなさこの密林から出るわよ。」

そう言つて立ち上がるリリー。エレナも同じように立ち上がりいそいそと帰還の準備をする。

「ええ！？まだ戦えるのに帰っちゃうの！？たしかにドスランポスの奇襲はコワイけど撤退するほどじゃ・・・」

「あんたバカア！？ドスランポスなんかどうだっていいわよ！もっとヤバいやつが現れたから撤退するのよ！」

「もっとヤバいやつですか？」

一人わからず首を傾げるエリス。ホントに分かってないようだ。

「エリス、あなたにも感じ無かった？先程、突然出てきたあの桁外れの存在感・・・いえ威圧感を。リリーなんか失く・・・いえなんでもありませんわオホホ（汗）」

エレナがリリーの失態を暴露しそうになったが顔を真っ赤にさせたりリリーに睨まれて沈黙した。

「ああ、もしかしてムーちゃんのことですか？」

数秒考えてやっと気づくエリスであった。

「は？何よムーちゃんって？またあんた動物でも拾ったの？まああんたのは違うわ。あの威圧感は古龍と同等、いえそれ以上ね。」

「古龍とあったことあるんですか？」

「・・・ずっと前にドンドルマに行ったとき古龍の死体がギルドに運ばれてきたのを見たことあるわ。死体だったけど、その威圧感はそのらの飛竜とは比べ物にならなかった。なのに、今回のそれはそれすら楽に上回る、桁が違ったわ。素人でもわかるほどよ。」

「はーそうなんですか。なら早く逃げないと全滅ですね」っとエレーナが明るく言うがリリーはホントに早く逃げたかった。

「あのー「なによ？あんたも早く準備しなさいよ。」・・・それやっぱりムーちゃんですし。ここにいますよ？」

「はー？どこにいるっていつのよそなの？」

「じじじ」

そついつてポーチから紅いマテリアを取り出すエリス。

「なにそれ？紅蓮石？珍しいもん持つてんのね。でもそれ生き物ですらないから。あんたアタシを馬鹿にしてんの？死ぬの？」

リリーが目が笑ってない笑顔でこめかみをピクピクさせてエリスのホッペを横にギューっと引っ張った。

「ひっひたいほひっほんほはほん！」（訳：痛いよりりーほんとだもん！）

「はいはいおふざけもそこまでにして帰りましょう。」

いつの間にかエレナがベースキャンプをしまい、いつでも出れるようになっていた。

「ごめんごめん、この天然娘があまりに寝ぼけたこと言ってるものだからね。」

「ホントなのに。」

「はいはいわかったから帰るわよ・・・Gya・・・」

なに今の？」

「・・・えと、なにかの鳴き声みたいでしたね。」

「あ、まさかりリーが言ってた古龍かも!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

エリスの一言でいつきに真っ青になる二人。

「まさかね・・・そんな偶然あるわけない・・・よね？」

「あはは、やだエリスったらもう・・・あるわけないですよリリー、ね？」

「そうよね、あは・・・あははは。」

「あはは。」

「みんななんで笑ってんの？私も笑うーあはは。あれ？雨降ってきたよ？」

「あら大変！早く行きましょリリー、エリス。」

「うわ、あっちの空真っ黒じゃん！はやくしないとこっちに雷雲くるよこりゃ！？」

素早く3人は乗ってきたアプトノスの引く竜車にたどり着き荷物を乗せる。

しかし、もう雷雲がすぐそこまで来ていた・・・災厄とともに。

「アプトノスが怯えちゃうから早く乗ってね。」

「わかってるよエリーナ・・・Gyaoooooooo・・・エッエリーナア・・・。」

「・・・どうやら悪い予感があたたったようね・・・。」

最初は感じ無かった威圧感が雷雲と共にどんどん近づいているのがわかる。まだ遠いのにここまで感じる威圧感、そしてリリーが昔感

じた威圧感とほぼ同じ。

つまりそれは

「古龍……クシャルダオラ……！！！！」

「リリー！エリス！早く乗って！見つからないうちに逃げるわよ！  
」

いつもはおとなしいエレナが怒鳴るように支持を出す。さすがに  
必死なのだ。

「エリス！なにしてんの乗りなさい！！エレナ！エリスが動かない！！！！」

そしてリリーも必死なのだが……何故かエリスが雷雲を見続けた  
まま動こうとしない。



古龍はもうそこまで来ているのに。

「「エリス！！！」」

二人が呼びかけるとやっとな雷雲を見つめてたエリスが二人のほうを向いた。そして口を開いて・・・

「大丈夫だよ二人とも。『あいつを呼んでしまったのは我のようだから我が対処しよう。安心してみているがいい。』ってムーちゃん言ってるから」

と言った。

「「へっ！？」」二人がハモった。

ついに雷雲が3人の上空を埋め尽くした。そこにはもちろん王者がいる。この嵐の支配者がいる。そしてその支配者はこの領域に感じた強者を探した。・・・が、いない。だが、獲物を見つけた。ハンターという弱者を。古龍はそこに降りようとした時・・・

絶大な存在が空から現れた・・・

「来たわよ来たわよどうすんのよー！？」

「あららららららららららららー」。

リリーはわめき、エレーナは顔を青くして、どちらも混乱していた。だって上空で自分たちでは簡単に一蹴されるほど力が大きい古龍が見てくるんだもの。

「あきらかに私たち見てるよね！？ねえ！？」

「そうですね・・・」

「こんなのウソよー！！！！」

「さよなら私、天国に行っても美人でね。」

混乱ここに極めり。

「もー2人とも慌て過ぎだよー！！いいから見ててー！」

そう言つと手に持っていたマテリアを掲げる。

そして

「流派！東方不敗は！王者の風よ！」

「へっ？？」

「全新！系裂！天破侠乱！」

「ほっ？？」

「見よ！東方は赤く燃えているうううっ！！

「ぱかーん（；・）（；・）」「」

『来て、ムーちゃん！！』

『（冗談で言ったのにあれを恥ずかしげもなくやるとはさすがマスターだww）あいよ！！』

「召喚！！                      バハムート！！！！」

召喚に応じマテリアから紅き光が上空へ立ち上り・・・雷雲が吹き飛んだ。

「なに・・・あれ？」

「あの威圧感はさっきの・・・」

そこには巨大で3対6枚の翼をもつ美しい銀色の竜がいた・・・

「いっけえええええええええムーちゃん!!」

『承知!!いくぞ古龍よ!王に挑む覚悟は十分か!!ぶるあああああああああ!!!!』

『フレア』

口から凄まじいエネルギー弾を数発放つ

『GYAAAAA!!!』

それに対しクシャルダオラも口から暴風のブレスをフレアにあて相殺させるそして一呼吸のあと・・・。

『GYAOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO  
OOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO  
O!!!!』

暴風のブラストを放つ。

『我に力比べとはいいい度胸だ!!ぶるああああああああああああああああああああああああああああ!!』

『メガフレア』

バハムートのメガフレアはクシャルダオラのエアロブラストを簡単に打ち破りクシャルダオラを飲み込んだ。

「「なあにこれ！？」」



## 第五話 上手に焼けましたー

【リリーSide】

『フンフンッフフフンフンッ』

「フンフンッフフフンフンッ」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

今私は夢でも見ているのだろうか？

先程まで荒れていた天気はウソのように晴れ渡っており、恐ろしい古龍は・・・

『むっそろそろか!』

「慎重にですよムーちゃん!」

「……………」

古龍は……

『今だ!』 キュピーーン!

「今です!」 キラーーン!

「……………」

古龍は……

「ウルトラ上手に焼けました――――！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

急造特大肉焼きセットの上で香ばし匂いを放っていた。

「ふっふっふ、さっそく切り分けるか。」

「この葉っぱに包める大きさに切り分けてください」

そう言つてエリスがお皿にする大きい葉っぱをもつてきて近くに置いた。なにこの状況を疑問に思わないのよ・・・まあエリスだからか。天然はコワイわ。

『まかせろエリス。』

そう言つてクシャルダオラの二倍はある巨体を動かし、焼肉セットから降ろしてこれまたバハムート？が急造した巨大な石の台の上に運び、頭の角を振り下ろして・・・『せーの！』シャキンッ！と首を切り落とし・・・は？

いいいいいいいまコイツ堅殻な古龍を外殻ごともとめせず首を切り落としたぞ！！！？それも自分の前頭部にある特徴的な大きな鋭い角で！！つてかその立派な角が泣いてるわよ！扱いに！！

『そらそらそら！』

どんどん部位を切り落としていく・・・角で。

誇りとか無いのかこの竜は・・・てかしゃべってるし・・・。

「どうしましたー2人とも？なんか元気ないですよ？」

「あんたのせいよ。」

「エリスのせいです。」

エレーナも私とおなじこと考えてるみたいだわ。当然だけど。

「これでお肉を載せてー一緒に焼いた特産キノコを割いてを載せてー完成！！みんなーできたよ！！」

ま、今は疲れたから私も食べようかな。いい匂いだからお腹減っちゃったわ。

エレーナと私はエリスと竜の元に行きいただくことにした。

ていつか古龍って食べてお腹壊さないかしら？モノは試し？

「パク……………むむ!!!!?」



第五話 上手に焼けましたー（後書き）

書いててコレはないわーと思いました（笑）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1082o/>

---

竜王（笑）と少女

2010年10月9日22時39分発行